

石井修道著 『宋代禅宗史の研究』

——中国曹洞宗と道元禅——

田 中 良 昭

一

本書は、大東出版社が、鈴木大拙氏の約一世紀にわたる活動によって、国際的な関心を深めている禅仏教の新たな創造を期して企画された『人学叢書・禅仏教』の一冊として、昭和六二年一〇月出版された本学教授石井修道氏の過去一五年間にわたる中国曹洞宗を中心とした宋代禅宗史研究の集大成である。すなわち本書の意図するところは、著者自ら本書巻頭の緒言の冒頭に、

本書は、昭和四七年に、「宏智広録考」〔駒沢大学仏教学部研究紀要』第三〇号〕と『攻媿集』にみられる禅宗資料——投子義青の法系を中心として——（『東方宗教』第三九号）の小論を発表してから、その後折に触れてまとめた曹洞宗関係の論考に、全面改訂を施し、宋代の曹洞宗を中心に、その教団の歴史と教理の展開を総合的にとらえたものである。

と明言される如く、宋代の曹洞宗を中心として、その教団の歴史と教理の展開を総合的に説明するところにあつた。もっとも、本書が曹洞宗を中心とした宋代禅宗史研究の集大成という点では、まさに

その通りであるが、宋代禅宗史という場合には、曹洞宗はその一部にすぎず、今一つの大きな流れである臨済宗をはじめ、雲門宗や法眼宗の動向を無視しては、到底語ることのできない内容を持っている。著者自身の今日までの宋代禅宗史研究の足跡を見ても、当然の事ながら、単に曹洞宗のみならず、臨済宗や雲門、法眼の両宗等を含めた宋代禅宗史の全体像を視野に入れたものである。特に本書第四章で詳説される黙照禅の代表的人物である曹洞宗の宏智正覚に対し、看話禅の代表者大慧宗杲並にその弟子達に関する研究も、既に多くの論文によってその成果を世に問うており、著者自身としては、それらを総合した宋代禅宗史の研究を目指しているのであって、その意味からすれば、本書は、従来の研究成果の一部という方が当たっているといえよう。ただ本書が、叢書の一冊であるという出版上の制約もあって、前記のテーマに限定されたものと推察され、更に今後、本書の続篇が刊行されることによって、宋代禅宗史の全貌の解明されることが十分に期待されることである。

このように、本書は、著者自身にとっては従来の研究成果の一部であろうが、しかし実際には、五百頁を超える大冊であり、その内

容についても、叢書の監修者の一人である本学総長鏡島元隆先生の高い評価と御懇憑を受け、既に学位請求論文として本学に提出済のものであり、本書の出版を契機として、更に一段の飛躍を期されていることが窺われる。本書はまた、「宋代禅宗史の研究」という主題に加えて、「中国曹洞宗と道元禅」という副題のあることが注目される。すなわち、著者の宋代禅宗史研究の意図するところが、単に中国の宋代という一時代の禅宗の歴史のみを問題にしているのではなく、宋代に発展した中国曹洞宗が、天童如浄に参学し、一生参学の大事を了畢して帰国した永平道元によって、新たに日本に展開する道元禅にとって、どのような意味を持ち、いかなる役割を果たしたものであるか、を絶えず念頭に置いたものであることを如実に示している。道元禅が永平道元の説き示された禅であることは自明の理であるが、その道元禅が形成されるに至った歴史的思想的背景は何か、ということとは、道元禅を研究する場合の最重要課題といわねばならない。

従来、道元禅研究は、ややもすると道元自身の著作、乃至は以後の法孫による末書のみを研究対象とすれば事足りりとする風潮がなきにしもあらずであった。しかし宗乗というならいざ知らず、宗学という以上、最早そうした考え方で十分とはいえないであろう。筆者自身、本学に学んだ一人として学生時代を振り返ってみるのに、当時の道元禅研究の双璧は、衛藤即応先生と榊林皓堂先生であった。周知の通り、衛藤先生は、宗教哲学の上に、仏教学、禅学、宗学を位置づける体系化を目指しておられ、組織仏教学の名のもとに、極めてスケールの大きな宗学論を展開しておられた。一方、榊林先生も、道元禅成立の背景としての中国禅に関心が深く、道元禅

を宋朝禅との関わりの上で問題にされ、更に遡って、『六祖壇経』と道元禅に関する秀れた論文や、国訳一切経に収載された『六祖壇経』の解題及び和訳等は、先生の道元禅研究の視点が、中国禅思想の展開の上にあったことを示している。また道元禅形成の直接の背景としては、道元自身がそのもとで大事を了畢したという天童如浄の禅風を挙げねばならないが、この天童如浄の研究には、昭和五八年八月、鏡島元隆先生によって春秋社から出版された『天童如浄禅師の研究』があり、そこでは、『如浄語録』の訳注と如浄の伝記、思想が総合的に研究されて、急速な進展がなされている。しかし更に遡って、中国曹洞宗全体を視野に入れて、それと道元禅との関係を論じたものは、従来ほとんどなかったといっても過言ではない。その意味で本書は、まさに前人未踏の荒野に分け入って、新たな道を開拓した画期的な労作として、高く評価されるべきものと考え

る。

尚、宋代禅宗史、とりわけ中国曹洞宗史の研究書としては、周知の通り菩提達摩から天童如浄までのいわゆる中国曹洞宗の歴史を、三冊の大著にまとめた宇井伯寿先生の『禅宗史研究』『第二禅宗史研究』に続く第三巻、すなわち『第三禅宗史研究』がある。これは第二次世界大戦中の昭和一八年四月、岩波書店から出版されたものであり、今日からすると四五五年もの歳月を遡るものである。約半世紀近くを経過した現在、宇井先生のそれは、偉大な研究成果ではあるが、既に一つのモニュメントとならざるを得ない。しかも近年の宋代研究は、各分野にわたって著しく進展し、新たな資料も続々と出現していることからすれば、先人の偉大な業績に導かれつつも、そこから更に一段と飛躍することこそ、今日の学者に課せられた責

務といわねばならない。本書は、その附録として、約一六〇頁もの紙幅をさいて「資料篇」を設け、一八種にわたる塔銘、碑銘の校訂、訳注を掲げているが、そのいずれもが学会未公開の貴重な新資料ばかりであり、その点からもこうした責務を十分果たしたものとして、評価されるべきところである。

学問研究にとって、従来の資料に加えて未知の資料を探索し、新たに得られた資料を駆使して研究の前進をはかることは当然のことであるが、特に禅宗の歴史資料を取扱うに際しては、その資料の成立の背景や意図というような、資料の持つ独自の性格を十分に検討してかかる必要があることが叫ばれて既に久しい。すなわち、主として唐代に成立した初期の禅宗の史書の性格を明らかにすること、鋭意専念されて得られた画期的な成果が、昭和四二年五月に法蔵館から出版された柳田聖山先生の『初期禅宗史書の研究』であるが、著者の宋代禅宗史資料に対する基本的立場も、この柳田先生のそれに倣い、その応用であったことは、著者自らその緒言に述べるところである。著者は、柳田先生の著作に学ぶのみならず、その研究を始めた頭初から終始その指導を受けられ、特に昭和五六、五七年度の在外研究員として、二年間にわたり京都大学人文科学研究所に於いて、直接嚆咳に接し、更には、同じく京都で、中国文学の世界的泰斗であり、禅語録にも極めて造詣の深い入矢義高先生の薫陶をも受けるという幸運に恵まれている。これらの諸先生のもとでの原典の輪読会を通じて磨きかけられた資料の読解力があればこそ、新資料の訳注という楽めて困難な仕事をも可能にし、本書の価値を一層高からしめた、ということができらるであらう。

石井修道著『宋代禅宗史の研究』（田中）

二

さて、やや前置きが長くなったが、ここで本書の本論部分についてこれを紹介することにした。本書の本論部分は、全体で四章からなる。その章名を挙げれば左の通りである。

第一章 『景德伝燈録』の歴史的性格——序論にかえて——

第二章 中国初期曹洞宗教団の成立

第三章 北宋代の曹洞宗の展開

第四章 宏智正覚と默照禅の確立

以下各章毎にその内容の概要を述べることにしよう。

まず第一章は、副題に「序論にかえて」とあるように、本書全体の序論に相当するものであり、宋代禅宗史研究の第一資料ともいべき『景德伝燈録』の歴史的性格を、それと前後する同時代の他の禅宗史書との関係の上から明らかにしたものである。

すなわち、第一節の『大宋高僧伝』から『大明高僧伝』へ——十科の崩壊と高僧伝の断絶——では、梁・唐・宋の三高僧伝を構成する十科の分類が、『大明高僧伝』に至って訳経・義解・習禅の三科のみとなったという十科の崩壊の実態が、実践仏教の抬頭、特に禅宗教団の発展の結果であるとする見解を示し、また『大宋高僧伝』から『大明高僧伝』の間には、百年以上にわたって禅僧の伝がとりあげられない事実をつきとめ、その理由を『景德伝燈録』に始まる五燈、特にその最初の『伝燈録』が、高僧伝に代る役割を果たしたことを明らかにしている。

第二節の『仏祖同参集』と『景德伝燈録』では、『伝燈録』の序者である楊億に、彼の文集として『武夷新集』なるものがあり、

その巻七にある「仏祖同参集序」と「景德伝燈録序」とを比較することによって、『伝燈録』の編者道原は、最初は圭峰宗密の教禅一致思想を継承して、「仏」（教）と「祖」（禅）との「同参」（一致）を述べようとして『仏祖同参集』なるものを編纂したが、これが「伝燈録序」にいう『旧録』に当る可能性の強いことを挙げ、それが後に教禅一致思想から教外別伝思想へと立場を転換し、この新たな立場から編集されたのが『伝燈録』ではなかったか、という『伝燈録』成立の背景についての推論がなされている。

第三節の「撰者永安道原について」では、元刊本の鄭昂の跋に、『景德伝燈録』の撰者を西余拱辰とする説があることに因み、新たに張方平の『楽全集』巻三三にある「禅源通録序」によって、洪辰の編集したのは『伝燈録』ではなくて、実際は『禅源通録』二四巻であり、鄭昂の混乱によることを明らかにし、先の「仏祖同参集序」とも併せて、『伝燈録』が永安道原の撰述であることを確定し、従来からあった『伝燈録』の撰者問題に終止符を打っている。更には、伝記の必ずしも明確でない永安道原について、『伝燈録』の記述内容を分析して、道原が直接見聞した事迹や当時の宗教現象への関心、『伝燈録』が基づく資料等から、道原の人物的傾向を類推している。

第四節の「『宋高僧伝』と『景德伝燈録』」では、その成立が僅かに一六年しか違わないにもかかわらず、両者の禅宗把握の仕方に関する大きな差異のあることを、『宋伝』の習禅篇と『伝燈録』を比較して論証している。その結果得られた両者の特色は、『宋伝』の撰者贊寧は、浙江省に発展した玄沙を正統とする法眼宗に対して、この系統のみ青原下九世までの系譜が確立できる如く格別高い評価を与え

ているのに対し、この法眼宗に属する『伝燈録』の撰者道原は、特定の宗派を特に意識したものではなく、五家を集大成したところに特色があり、ここに『宋伝』の十科の崩壊する時代的背景の上に、新たな燈史としての『伝燈録』の出現があったことを論証している。

第五節の「『祖堂集』と『景德伝燈録』」では、泉州招慶院の静・筠二禅徳による『祖堂集』を生み出した閩（南唐）の禅と、道原の『伝燈録』を成立させた呉越の禅を概観し、『祖堂集』と『伝燈録』の各々の編纂上の社会的背景を追求している。『祖堂集』の撰者とされる静・筠二禅徳については、ほとんど知られていないが、この二禅徳が『祖堂集』を編纂した泉州招慶院の時の住持が、浄修禅師省澄である。省澄は敦煌文献である『泉州千仏新著諸祖師頌』の著者であると共に、『祖堂集』の監修者であり、序文の撰者でもある。この省澄の伝記も、従来ほとんど知られていなかったが、著者は、新たに『泉州開元寺志』と『泉州府志』巻六五によってこれを明らかにし、また『伝燈録』の撰者道原の師に当る天台徳韶の伝記を詳細に検討することによって、これら二師の見聞が、『祖堂集』と『伝燈録』の成立に大きくかかわっていたことを推定している。

第六節の「『景德伝燈録』巻二七の特色」では、巻二七の後半が公案とその著語を集めたものであって、これが公案の源流に当り、後の燈史の「拈古門」に属する宋代禅の萌芽であるとし、しかも全部で七四則の古則に対して、八七回の著語を一八人が下すのに、その内七三回の著語が法眼宗の八人によって下されている事実に着目し、この特色がそのまま『伝燈録』自体の性格と一致することを明らかにしている。

第七節の「皮肉骨髓得法説の成立背景について」では、禪宗開祖としての達磨像の変遷の中で、重要な意味を持つ達磨とその門人の得法に関する「皮肉骨髓」の物語を通して、教禪一致説から教外別伝説へと転換した過程を考察している。まず皮肉骨髓得法説の変遷過程をふまえて、教禪一致を説く宗密の肉骨髓三人得法説が、彼の禪相判釈と呼ばれる教判論に基づくものであることを明らかにし、後に天台の四明知礼と法眼宗第三世の天童子癡との論争は、知礼の批判が『伝燈録』のそれにはなく、宗密の『裴休拾遺問』の肉骨髓説に対するものであり、一方、子癡の説は、『伝燈録』による皮肉骨髓説に基づくものであって、この『伝燈録』の立場が、教禪一致を説く宗密を傍系としてしりぞけ、教外別伝の禪を代表するものとして意義づけられている。

以上第一章では、『伝燈録』が、教禪一致思想から教外別伝思想へと禪思想の歴史の動きの中で成立したことを明らかにし、宋代禪宗史が、宗密教学に関わりつつ、これと反撓し合い、交流し合いながら形成されていったところにその特徴を見出ししている点は、従来、中国禪宗史における宗密の役割が必ずしも明確でなかっただけに、本書の大きな前進といえることができるであろう。

第二章の「中国初期曹洞宗教団の成立」は、青原下石頭希遷から薬山惟儼を経て洞山良价に至る間の、いわゆる初期曹洞宗教団成立の状況を歴史的に考察したものであり、四節からなっている。

第一節の「石頭は真金鋪・江西は雜貨鋪」は、その題名が示す通り、石頭に代表される青原系と、馬祖に代表される南嶽系との宗風の相違を考察する。この題名とされた言葉は、『祖堂集』の薬山惟儼章に収める道吾円智の出家物語の中に出るものであり、『祖堂集』

では、史実に反して道吾を見、雲巖が弟とされ、先に薬山下で悟った道吾が、弟の雲巖に書いた手紙の中にしたためられ、雜貨を売る店である馬祖系を批判して、真金を売る店の石頭系を推奨したとする。しかし真金鋪の石頭系は、真人を求めたがために、多くの弟子は育たず、逆に批判された雜貨鋪の馬祖系が、「よろづ屋」よりしく日常に最も必要な品々を売る店として、大店舗となるのが歴史の事実であり、その雜貨鋪禪を宣揚したものがこそ『宝林伝』であった、という。すなわち、ここに両系統の宗風が見事に示されているのである。

第二節の「洞山良价の伝記」は、著者が新たに紹介した余靖の文集である『武陵集』巻九に収める「筠州洞山普利禅院伝法記」によって、洞山の伝記と洞山の初期の教団の実態を明らかにする。特に若き洞山が、馬祖下の五洩靈黙の指示によって、趙州從諗を打出した南泉普願に参じたことが、後の洞山の宗風に大きな影響を与えたことを論述する。

第三節の「初期曹洞宗の宗風」では、一般には洞山―曹山の師資による宗風が、中国曹洞宗の宗名の根拠ともされる如く、曹山を洞山下の中心に考えがちであるが、曹山と雲居の伝記を比較検討して、洞山門下の領袖は雲居であることを明確にし、初期曹洞宗の宗風は、雲巖―洞山―雲居で継承され、それは「五位」ではなくて、「仏向上事」「三路」「刮骨禅」にあったことを『祖堂集』の記載によって明らかにし、更にそれを青原系の石霜慶諸と巖頭全豁による洞山の批評を通して裏付けている。

第四節の「洞山派下の消長」では、まず洞山教団の発展に大きな役割を果たしたのが鐘伝であることを、新出の余靖の「伝法記」によ

って明らかにし、次いでこの洞山教団が、王仙芝の叛乱と洞山の示寂によって一時勢力を失って解散するが、その後曹山が発展して洞山下を代表するに至り、ここに教団が再組織された際に、指導原理の役割を果たしたのが「五位説」であったことが推測されている。すなわち、中国初期曹洞宗教団成立の実情については、

曹洞宗というのは、洞山宗ではなくて、曹山宗であり、洞山の教団は一度王仙芝の叛乱で分散し、後に復興された教団に対する呼び名なのである。その時、洞山を承継したのは、曹山の法系であったことが確認できる。曹洞宗が五位思想をもって教団の指導原理にしていくのも、この時のことである。曹洞宗の宗風は、洞山の宗風とは異なり、曹山の宗風が全面的に表面に打ち出されるに至ったのである。（二〇五頁）

といい、洞山良价の宗風と曹洞宗の五位思想とは同じであるとする立場は、教団の発展過程を視野に入れて考察すれば、認めることができる。と結論づけているのである。

三

以上で本論前半の概要を紹介したので、以下後半についてその内容を概観したい。まず第三章の「宋代の曹洞宗の展開」は、四節からなり、特に美容道楷の果たした歴史的役割を中心として、宋代の曹洞宗の展開が論じられている。

第一節の「大陽警玄と投子義青」では、かねて知られている通り、両者の間が師資面授ではなくて、臨済宗の円鑑法遠によるいわゆる代付によって、法の相続がなされたことがまず問題にされている。このことは、投子自身が自らの出世開堂で天下に公言したこと

であり、中国ではこの説を否定する文献はなく、日本でも、永平道元、瑩山紹瑾によって認められていたのであるが、『建誓記』以後、この代付説が認められず、特に江戸時代の宗学者による様々な論議が惹き起されるに至ったとする。この代付の事実を明確にするために、大陽警玄と投子義青の伝記が詳細に検討され、大陽の法が代付によって投子に伝えられた時に、臨済宗とは対照的な曹洞宗の自覚が促された点で、北宋時代の曹洞宗史上の画期的な事件として位置づけられている。

第二節の「随州大洪山における曹洞宗の復興」では、投子の活躍による安徽省の曹洞宗教団が、この地に発展せず、それに代って大きく発展する基盤となったのが、湖北省随州の大洪山であること、著者が『湖北金石志』の中に新たに発見した報恩、道楷、子淳に関する塔銘類（資料篇の三〇六）によって明らかにする。特に投子下の美容道楷が、定照禅師の賜号を辞退したことで惹起された道楷の溜州流罪事件を、覚範徳洪の『石門文字禅』卷二三所収の「定照禅師序」の記載によって明らかにし、これが曹洞宗教団史上の画期的事件となり、道楷のとった仏道に対する厳しい姿勢が、曹洞宗復興のエネルギーとなったことを論じている。

第三節の「芙蓉道楷の三賢孫」では、芙蓉道楷からいえば孫弟子に当る三人の秀れた門人達、すなわち慧照慶預、真歇清了、宏智正覚によって、北宋末に、湖北省の随州大洪山の曹洞宗が、福建省、浙江省へとその勢力を伸ばした歴史的経緯を、それぞれの伝記を検討することによって明らかにし、特に真歇が雪峰に住持となっていた時、大慧宗杲が福州へやって来たことに注目し、この両者の交渉について、大慧の師である円悟克勤をも含めて検討し、三賢孫によ

る曹洞宗の発展が、看話禪との対決という新たな局面に立たされるに至ったことを述べている。

第四節の「鹿門自覚派の変遷——北伝曹洞宗——」では、芙蓉道楷から丹霞子淳を経て三賢孫によって発展した流れである南伝曹洞宗が、後に永平道元によって日本に伝えられて大発展をする一方、中国ではこの派が元代に途絶えるのに対して、中国で続いた曹洞宗は、芙蓉道楷から鹿門自覚へ伝えられた系統であり、この派に万松行秀が出て北地に曹洞宗の発展する基盤を築いたところから、この派を北伝曹洞宗と呼び、この派の変遷について論じている。特に北伝曹洞宗では、鹿門自覚を天童如浄の法嗣とする説も現われて、後に系譜に混乱を生じ、別に芙蓉道楷の法嗣としては、『嘉泰普燈錄』巻五に、浄因自覚と鹿門自覚との異同が問題とされていたのに対し、『石門文字禪』巻一九所収の「鹿門燈禪師塔銘」（資料篇の八）と、著者自ら昭和五九年九月に鹿門山を訪れた際に、偶然発見した「宋故襄陽鹿門第二代燈禪師塔記」の記載によって、鹿門自覚が芙蓉道楷の法嗣であり、浄因自覚と鹿門自覚が同一人であることが確認され、更にその後北地に発展する北伝曹洞宗の万松行秀に至る人々の法系の整理がなされている。

以上、大陽警玄から投子義青への代付にはじまり、北宋代の曹洞宗の発展の跡を、道楷の活動を中心として論じ、特に多くの新資料を駆使してその実態の解明がなされた。かくして次章に、本書の中心をなす宏智正覚を論ずる前提が確立されたのである。

第四章の「宏智正覚と黙照禪の確立」は、五節からなり、宋代曹洞宗の代表的禪者である宏智正覚と、彼が主唱した黙照禪の実態を、同時代の大慧宗杲による看話禪、その後日本に新たな展開を

する道元禪等と対比しつつ明らかにしたもので、本書全体の最も主要な部分を成すものである。

まず第一節の「宏智正覚の伝記資料および略伝」では、最初に宏智の思想と宋代曹洞宗旨を集成したものとされる大分県泉福寺所蔵の宋版『宏智録』六冊について、これと従来用いられている大正蔵経所収の『宏智禪師広録』九巻との関係が論じられている。この両者については、既に著者が、禅籍善本古注集成の一冊として、昭和五九年五月に名著普及会から出版した『宏智録』上において影印対照しており、巻末の解題にその書誌学的研究が付されていて、著者の宏智乃至は黙照禪研究が、この新たな宋版『宏智録』に基づいてなされたところに、より高い価値を認めることができる。次に、宏智の伝記を検討するに当り、伝記の基本資料である周葵の「宏智禪師妙光塔銘」、趙令衿の「勅諭宏智禪師後録序」、王但庠の「勅諭宏智禪師行業記」の三種に、燈史類では最も古い『嘉泰普燈錄』巻九の「宏智章」を加え、それ等の本文の校定と読み下し文を、基本資料の撰述理由を含めて六段に分けて比較対照し、更に『宏智録』六冊の構成内容も勘案して、それ等を総合的に検討した詳細な伝記を明らかにしている。

第二節の「黙照禪の確立」では、宏智とその晩年に交渉のあった南宋代を代表する看話禪の大成者大慧宗杲との対比によって、両者が主張した黙照禪と看話禪の特色とその相違を明らかにする。すなわち、始覚門に立って悟りを強調する大慧は、本覚門に立って坐禪を重視する宏智の黙照禪を邪禪として批判したのであるが、この「悟り」を説かず、「坐禪」を重視したところ黙照禪の特色であるとし、そのことを『宏智録』の原文について具体的に示している。

第三節の「『宏智録』と道元禪」は、道元禪が修証観のまったく異なる看話禪と対立することは当然の事であるが、一方、中国曹洞宗の天童如浄を承け、黙照禪の流れに属するものとして位置づけられる道元禪が、果たして黙照禪とまったく同一のものであろうか、という疑問を投げかけ、両者の間の類似性が強ければこそ、むしろその間にひそむ相違点を探ることによって、黙照禪の特色を究明しようとしている。すなわち、まず道元禪の修証観をみるために、道元の略伝を述べ、天童如浄との面授時に身心脱落した事実や、参禅こそ身心脱落であるとするところに、道元禪の特色があることを述べ、宏智禪と道元禪については、

宏智禪は、始覚門と対立する立場で本覚門に立ち、本覚門なるがゆえに修行の必要性を強調するのではなく、無為自然の道家的な立場に近い。本覚門と始覚門が相互対立する限り、本覚門は本覚だおれに傾く可能性が存する。道元が本証妙修の禪を構築したのは、妙修を強調することによって、本覚に安住することを拒否したがためである。（三六九頁）

といて、両者の修証観の違いを指摘し、そのことを『宏智録』と『道元和尚広録』を比較対照した具体例四種によって明らかにしている。

第七節の「大休宗瑤と足庵智鑑」では、真歇清了派の大休宗瑤とその弟子足庵智鑑の行状を中心として、中国曹洞宗の南宋期における動向を概観する。特にこの両者の伝記を知る「天童大休禪師塔銘」と「雪竇足庵禪師塔銘」は、いずれも著者が新たに発見紹介された楼鑰の『功媿集』巻一一〇に収載されるものであり、その本文の校訂と訳注は、資料篇の一三と一八に掲載されているが、この新

資料によって両者の伝記と禪風を検討し、この時代に至って、宏智の黙照禪が看話禪の影響を受けて変化し、また大慧派も含め、南宋禪が五山制度とも関連して、国家仏教の色彩の強いものになったことが明らかにされている。この足庵智鑑の門人である天童如浄もその例外ではあり得ないが、紫衣師号の辞退にあるような稀にみる反骨精神の持ち主であったことが確かめられている。

最後の第五節の「結び——南宗禪の変貌」は、いわば本書全体の結論に当る部分であり、その副題にみられるように、中国禪宗としてその正統の位置を占めていた南宗禪が、南宋時代の曹洞禪に至って大きく変貌した事実を明らかにする。すなわち、著者の言を要約すれば、次の如くである。

定慧等を出発点とし、無作定を基本とするのが南宗禪であるが、その立場からすれば、黙照禪こそが南宗禪の正統であり、悟を目的とし、定に作為をともし、手段を弄する看話禪は異端となる。しかし、南宋時代になると、こうした正統・異端の範疇では律しきれない状況となり、大慧の看話禪が、時代の要求に応じて始覚門に立脚した異端の宗教を構築し、そうした公案の流行は、曹洞宗の宗風をも一変させ、天童如浄もその例外ではなかった。この意味からすれば、宏智の黙照禪は、宏智一代限りのものであり、彼の示寂とともに終わった、とみななければならない。

従って、如浄禪を明らかにするには、大慧派の動きを解明しなければならず、更に曹洞宗史に絡む如浄禪、道元禪、日本達磨宗の諸問題を考究した上でなければ、南宋禪の正確な把握は不可能であり、この時代には、禪は禅者のみならず、知識人や民衆にも浸透しているので、そうした分野も併せて考察しなければならぬ

い。(四〇三—四〇八頁要旨)

というものである。

このように、著者は自ら追求すべき今後の課題を列挙した上で、最後に、本書の特色を次のように述べて結びとしている。

本書は、従来の中国曹洞宗の教理史や教団史の研究で取り挙げられなかった文献を新たに紹介し、今後の宋代禅宗史の研究のために、深みと巾を与える一つの段階を示した文献研究として、一応の成果報告としておきたい。(四〇八頁)

ここに至って、最初に述べた筆者の希望が、はからずも著者自身によって、今後の課題として提示されているのを見るのである。しかしながら、附録の「資料篇」に、本文の校訂と訳注を収録した一八種にのぼる塔銘・碑銘類は、いずれも従来学会ではまったく知られることのなかった新資料ばかりであり、更に資料一九には、「宋代禅者の塔銘・碑銘類一覧表」が掲げられ、ここには一四八点に参考三点の都合一五一点がリストアップされており、それらの出典をみても、極めて多岐にわたる文献が渉猟されており、著者の厳密な文献研究の成果が如実に示されている。同時に著者は、十数次にわたる駒沢大学中国仏教史蹟参観団の一員として、ほとんど毎年のように中国大陸へ渡り、禅宗の古寺古跡を探訪し、実地調査を重ねている。その真摯な学究者としての積み重ねが、本書の学問的価値をいやが上にも高めた、といっても決して過言ではない。著者の更なる研鑽を期待し、本書紹介の筆を措くことにしたい。(大東出版社、昭和六二年一〇月一五日発行、A5版、口絵八頁、発刊の辞・凡例・緒言・目次一四頁、本文五六六頁、索引四四頁、一三、〇〇〇円)